

沖代地区条里跡 長者屋敷官衙遺跡 定留鬼塚遺跡

市内遺跡発掘調査概報6

2012年度

中津市文化財調査報告 第63集

2013
中津市教育委員会

例　　言

一、本書は大分県中津市教育委員会が2012年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は2012年度国宝重要文化財保存整備事業および2012年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査主体　　中津市教育委員会

　調査責任者　　廣畠　功（中津市教育委員会教育長）

　調査委員　　後藤　宗俊（別府大学名誉教授）

　渋谷　忠章（元大分県立歴史博物館長）

　高瀬　要一（元奈良文化財研究所文化遺産部長）

　山中　敏史（奈良文化財研究所名誉研究員）

　清野　孝之（　　同　　考古第三研究室長）

　清水　重敦（国立大学法人京都工芸纖維大学准教授）

　調査指導　　後藤　晃一（大分県教育庁文化課副主幹）

　調査事務　　藤原　義郎（中津市教育委員会文化振興課長）

　田中布由彦（　　同　　参事）

　平田　由美（　　同　　文化財係）

　調査担当　　高崎　章子（　　同　　文化財係長）

　浦井　直幸（　　同　　文化財係）

　森田　利枝（　　同　　文化財係）

　荻　　幸二（　　同　　文化財係）

一、沖代地区条里跡の調査を浦井が、長者屋敷官衙遺跡の調査を高崎・森田が、定留鬼塚遺跡の調査を荻が行った。

一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章、第2章を浦井が、第3章1、2を森田が、3を高崎が、第4章を荻が担当した。

一、遺構、遺物の実測、製図、拓本などは調査担当者の他、浅田くるみ、穴井美保子、猪立山順子、岩本敏美、金丸孝子、佐藤智子、塩谷絹子、友綱あんり、橋内順子、古市智子、松村たか子が行った。

一、現場作業は下記の皆さんの協力による。

塩谷絹子、松村たか子、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、川口政代、福成誠一、井上里絵、中坂真基子、猪立山順子、浅田良光、江藤武志、辛島孝、熊井雅和、渡邊正一、黒木徳男、郡司掛進、末松かすみ、田中政恵、角美枝子、高橋千津子、林美智代、山尾カズエ、若木和美（順不同・敬称略）

目 次

例言
目次

第1章 地理と歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡	3
1. これまでの調査	3
2. 角田地区	4
第3章 長者屋敷官衙遺跡	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 平成24年度調査区の概要	6
(1) 11区	6
(2) 12区	6
(3) 13区	7
3. まとめ	7
第4章 定留鬼塚遺跡干見ノ上地区	13
1. 調査に至る経緯	13
2. 調査の成果	13
3. 小結	18
報告書抄録	21

図 版 目 次

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)	2	第2図 沖代地区条里跡周辺図 (S=1/25,000)	3
第3図 調査区位置図 (S=1/2,500)	4	第4図 調査区位置図 (S=1/2,500)	4
第5図 調査区位置図 (S=1/2,500)	5	第6図 調査区位置図 (S=1/2,500)	5
第7図 平成24年度調査区位置図 (S=1/1,500)	8	第8図 長者屋敷官衙遺跡11区全体図 (S=1/250)	9
第9図 長者屋敷官衙遺跡12区全体図 (S=1/250)	10	第10図 13区図 (S=1/250)	11
第11図 11区出土土器 (S=1/3)	11	第12図 調査区位置図 (S=1/25,000)	13
第13図 調査区位置図 (S=1/2,500)	13	第14図 グリッド位置図 (S=1/600)	13
第15図 遺構配置図 (S=1/250)	14	第16図 第1号墳平・断面図 (S=1/60)	15
第17図 第1号墳出土土器 (S=1/3)	15	第18図 第2号墳平・断面図 (S=1/60)	16
第19図 第1号土坑平・断面図 (S=1/20)	16	第20図 第1号土坑出土土器 (S=1/3)	16
第21図 第2号土坑平・断面図 (S=1/20)	17	第22図 第2号溝状遺構平・断面図 (S=1/60)	17
第23図 第1号柱穴出土土器 (S=1/3)	18		

写 真 図 版

写真1 遺構検出状況	4	写真2 トレンチ状況	4
写真3 遺構検出状況	5	写真4 遺構検出状況	5
写真5 11区	11	写真6 1号住居	11
写真7 2号住居	11	写真8 空中写真	12
写真9 SD-26	12	写真10 SD-27	12
写真11 SD-28	12	写真12 石組遺構	12
写真13 第1号墳完掘状況	18	写真14 第2号墳完掘状況	19
写真15 第1号土坑遺物出土状況	19	写真16 第2号土坑完掘状況	19
写真17 第2号土坑半截土層	19	写真18 第2号溝状遺構完掘状況	19
写真19 第2号溝状遺構土層断面	19	写真20 第1号土坑出土土器	20
写真21 第1号柱穴出土土器	20	写真22 第1号墳出土土器	20

第1章 地理と歴史的環境

1. 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置し、山国川を挟んで福岡県と接する。中津市の地形的、文化的特徴を語る上で山国川の影響は大きい。英彦山系に端を発するこの川は、中津市山国町・耶馬溪町で新耶馬溪溶岩・凝灰集塊岩を削り、美しい渓谷となって流れる。平成24年7月に起こった、この辺り一帯の豪雨災害は記憶に新しい。その後洪積世台地である下毛原台地を流れ、三口あたりで平野に出る。この平野もまた、山国川の堆積作用がつくりだしたものである。平野内は扇状地形を呈し、三口を扇頂として扇央部分は広大な水田地帯となっている。扇端はJR日豊線のライン周辺となり、さらにその先は分流中津川との間に三角州である小祝島を形成する。平野部の西側は下毛原台地（洪積世台地）が続く。台地は舞手川などの小河川による開析を受け、周防灘に向かって幾筋もの小さな谷がのびる地形となっている。下毛原台地とはもともと同じ台地で、犬丸川によって分断された長峰原台地が宇佐方面に続き、下毛原と同様、小河川による谷地形が発達する。

2. 歴史的環境

市内で最古の人間活動が確認できるのは三光、コマノツメ遺跡の旧石器時代である。このほか才木遺跡や法垣遺跡で後世遺物に混じって旧石器の出土が確認されている。日田市小石坂遺跡、三尾遺跡、ヘリ山遺跡の在り様を見ると、旧下毛郡内の山地に旧石器時代遺跡の存在も想定される。

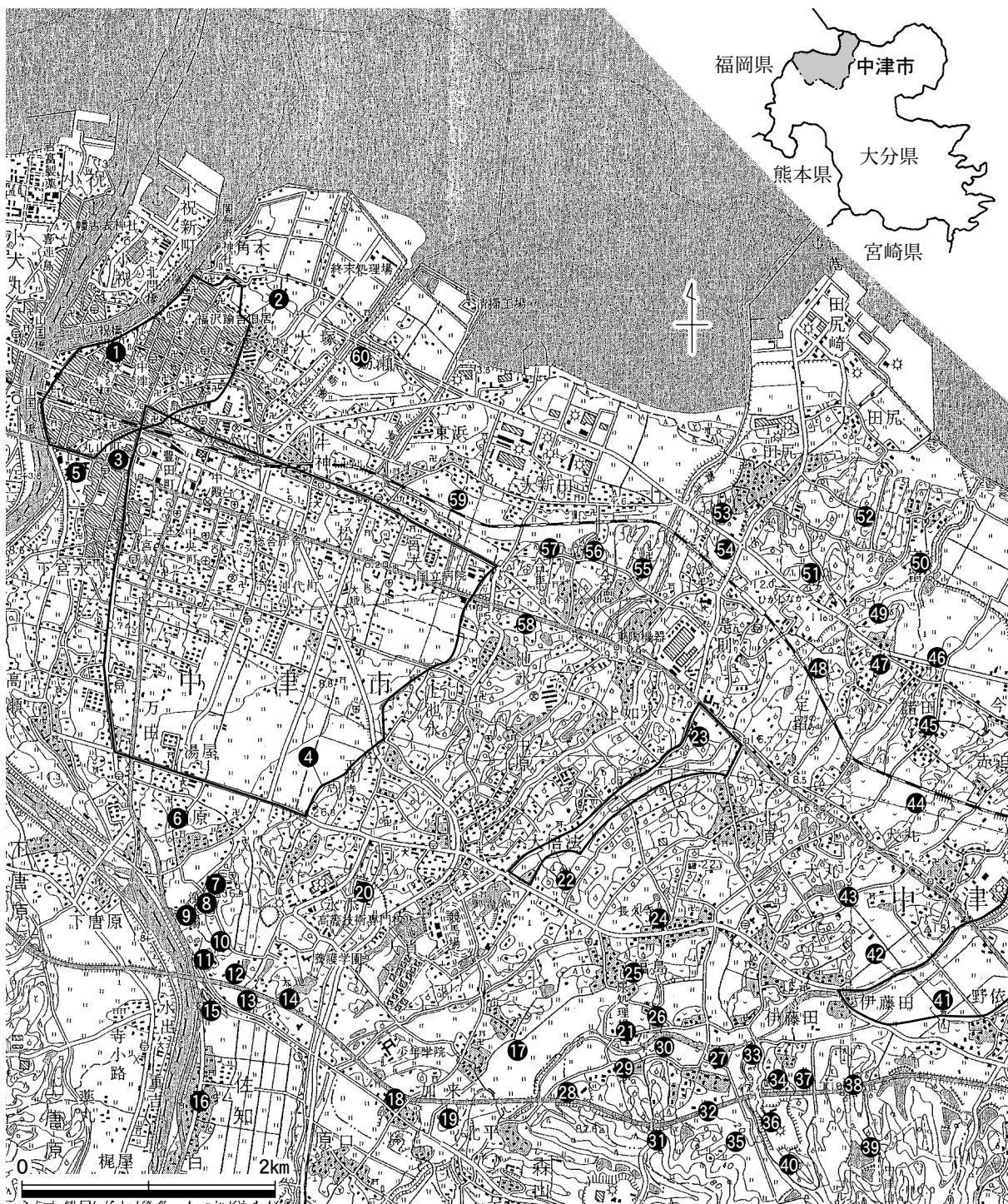
一般に稻作が普及する以前の生活は、山地・丘陵の日当たりの良い緩傾斜地を選ぶ傾向にあるが、洞穴もまた、天然の覆屋を持つ住居として利用された。本耶馬溪町粉洞穴では、縄文時代早期から後期までの文化層が確認され、住居や埋葬地として利用されたと考えられている。縄文時代晩期の加来東遺跡は犬丸川沿いの水田にあり、見つかった遺構は犬丸川の古い支流と考えられる自然流路である。周辺に集落の存在が想像でき、人間が生活域を低地に広げ始める動きを見て取れる。

弥生時代水田は中津市内では確認されていないが、集落は低丘陵上や河川の自然堤防上で発見されている。古墳時代の集落立地もほぼこれを踏襲するものである。墳墓の立地には被葬者の故地との関係が重要視される。今回報告する定留鬼塚遺跡の1号墳、2号墳は周防灘に面した低丘陵上に位置している。海辺の集落の長が眠る墓かもしれない。

古代に入ると、土地利用にも中央集権の影響が色濃くなる。国郡里制を布き、官道の敷設、水田開発が行われた。土木工事による大規模開発のはじまりである。沖代地区条里跡は古代の土地区画整理とも言える、条里制によって作り出された計画的区画水田である。古代官道「豊前道」を南の基線として割り付けられたと考えられている。これらの開発には、地元の有力者が深く関係していたと見られる。有力者は郡司として地元の開発に係わったのであろう。水田開発によって税の增收をはかることは当時の国策であった。そして、地方税を納めたのが郡の正倉であった。長者屋敷官衙遺跡は下毛郡衙正倉跡で国指定史跡となっている。正倉は10世紀前葉には火事で消失している。律令体制の崩壊によって、公的機関がその機能を失う時期、正倉の再建はされなかつた。

参考文献 豊田寛三・後藤宗俊・飯沼賢司・末廣利人『大分県の歴史』(株)山川出版社 1997

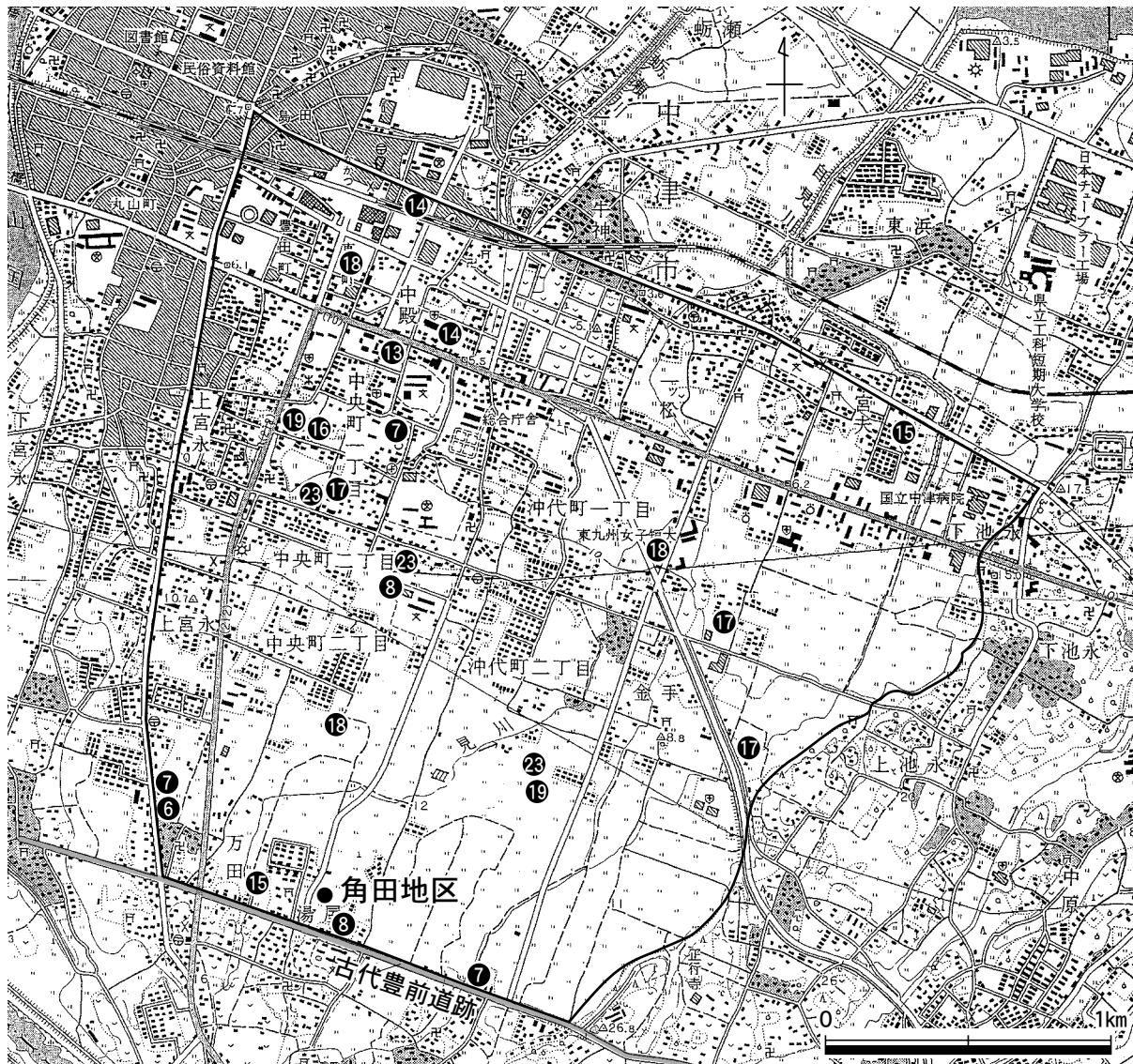
中野幡能 監修『大分県の地名』(株)平凡社 1995



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 和間貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畠遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. 木ヤ池窯跡 | 51. 是能遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 高畑遺跡 | 17. 加来東遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手橋東段上遺跡 |
| 6. 相原廃寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是則遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 法垣遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 上畑成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラヌノ遺跡 |
| 9. 坂手隈城跡 | 21. ボウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 弊旗邸古墳群 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 東浜遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 古濱東遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

第2章 沖代地区条里跡



第2図 沖代地区条里跡周辺図 ($S=1/25,000$) ●の中の数字は調査年度（平成）を表す

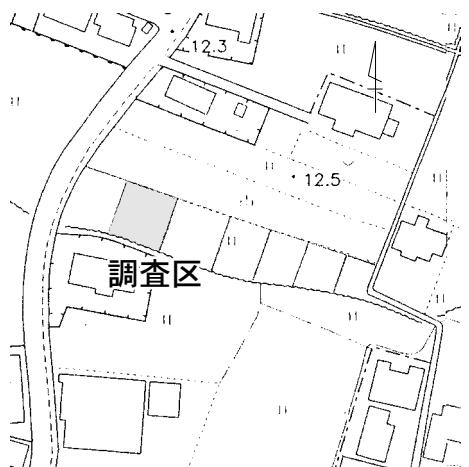
1. これまでの調査

沖代地区条里跡は、山国川右岸の平野部に施工された古代・中世の水田跡である。その範囲は、現在のところ南北2.7km、東西3.1kmとして周知されているが、条里の西限は不明瞭である。近年まで広範囲に往時の方形区画を見ることができたが、東部・南部地域を残して急速にその景観は失われつつある。

中津市教育委員会では1995年度から国庫補助を受け、開発に伴う確認調査を実施してきた。6世紀後半代の掘立柱建物・竪穴住居・溝遺構は、古代豊前道跡沿線で確認されている（平成7・8・15年度調査）。奈良時代の竪穴住居は条里西の平成19年度調査区で発見された。また、当該期の可能性のある水田区画が条里北側の平成14年度調査区で見つかっている。11世紀中～後半代の土坑は古代豊前道跡北側の平成15年度調査地点で確認された。中世末の遺構は、平成17年度苅又地区で調査された溝遺構があり、景德鎮産小皿小片が出土している。

今年度は、角田地区にて民間開発に伴う確認調査を4件実施した。

2. 角田地区



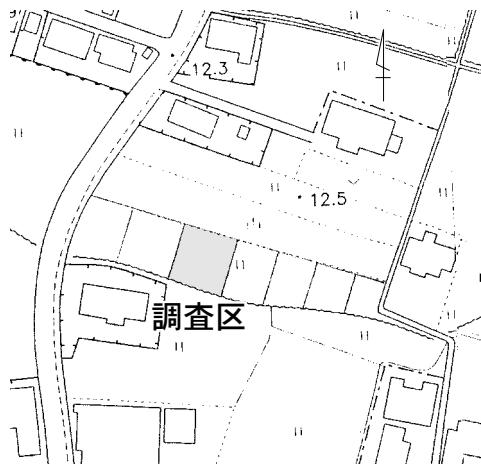
第3図 調査区位置図 (S=1/2,500)



写真1 遺構検出状況（西から）

平成24年10月16日、中津市の個人より中津市大字湯屋326-5地内における個人住宅建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。現地の水田は既に宅地分譲のために盛土造成されていた。地下深くまで影響を与える工法であったため、平成24年10月19日に確認調査を実施した。

調査は調査区内の建物建設域に対してトレンチを1本設定して行った。造成面から0.8～0.9mは造成層、その下は現代～近世の水田であり、黄褐色の地山に至った。幅約1mの東西方向を指向する溝状遺構を1条、北東方向を指向する細い溝状遺構を1条検出した。工事は遺構面にまで達することから本調査の必要性が認められた。



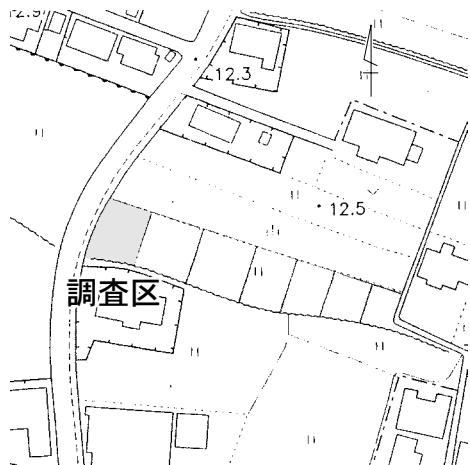
第4図 調査区位置図 (S=1/2,500)



写真2 トレンチ状況（西から）

平成24年10月16日、中津市の個人より中津市大字湯屋326-6地内における個人住宅建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。地下深くまで影響を与える工法であったため、平成24年10月19日、西側隣接地調査後に確認調査を実施した。

調査は調査区内の建物建設域に対してトレンチを1本設定して行った。地山の深さなど西側と変化はなかったものの、遺構・遺物は発見できなかった。



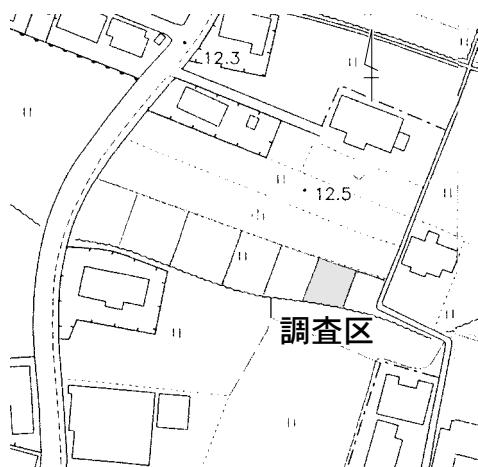
第5図 調査区位置図 (S=1/2,500)



写真3 遺構検出状況（東から）

平成24年11月21日、中津市の個人より中津市大字湯屋326-1地内における個人住宅建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。地下深くまで影響を与える工法であったため、平成24年12月3日、確認調査を実施した。

調査は調査区内の建物建設域に対してトレーナーを1本設定して行った。その結果、造成面から1.2m下の標高11.7m付近において幅0.3～1mの溝状遺構を4条確認した。溝は重複しており、各々に時期差があるものと考えられる。調査区東端から延びる溝状遺構は、東側隣接時に確認した溝状遺構の延長部分にあたると想定できる。工事は遺構面にまで達することから本調査の必要性が認められた。



第6図 調査区位置図 (S=1/2,500)



写真4 遺構検出状況（東から）

平成24年12月11日、中津市の個人より中津市大字湯屋326-9地内における個人住宅建設に伴う文化財保護法93条の届出がなされた。地下深くまで影響を与える工法であったため、平成24年12月19日に確認調査を実施した。

調査は調査区内の建物建設域に1本のトレーナーを設定し掘削を行った。その結果、造成面から1.3m下位の標高11.9m付近で東西方向を指向する幅1m以上の溝状遺構1条を検出した。工事は遺構面にまで達することから本調査の必要性が認められた。

第3章 長者屋敷官衙遺跡

1. 調査に至る経緯

長者屋敷官衙遺跡は古代下毛郡衙正倉跡と推定される遺跡で、平成7年の発掘調査以来、正倉の中心となる掘立柱建物跡、礎石建物あわせて14棟の大型建物跡が確認されている。平成22年2月22日に国指定史跡に指定されたが、周辺にまだ関連遺構が展開する可能性があるため、確認調査を継続している。また、長者屋敷官衙遺跡と重なって中世八並城跡の遺跡も存在し、今年度調査区においても城郭に伴う堀を確認した。

2. 平成24年度調査区の概要（第7図）

遺跡は南から北へのびる舌状台地の先端部分に位置し、遺跡の中心となる建物群は溝に区画された約90×120mの範囲で確認されている。今年度調査は区画範囲の東西にそれぞれ調査区を設定し、周辺遺構の展開を確認するためのものである。区画の西側は上下2段の畠地で地形の変換点となっているため、この畠地を11区として確認調査を行った。また、東側も12区として調査を行った。さらに、遺跡の南限を区画する円林寺境内のSD-13（平成8年度調査）に近接する円林寺墓地内にトレントを設定し確認調査を行った。

なお確認した遺構は完掘していないが、一部トレントを入れて規模・構造を確認したものがある。

（1）11区（第8図）

調査区は上下2段の畠地で上段の標高は約29m、下段は約25mである。

上段調査区については、面積250m²。確認した遺構は竪穴住居2棟、ピット約200基。出土遺物は古墳時代中期 土師器、炭化米。

下段調査区については、面積430m²。遺構は確認していない。面積の半分以上が攪乱を受ける。

遺構

竪穴住居2棟は調査区東南部分で確認した。いずれも一部調査区外になるので正確な規模は分からぬが、2号住居が2.3（復元）×1.8mの長方形（12°東偏）、1号住居も同様な形であれば長軸2m以上短軸2m（15°東偏）ほどの規模になるであろう。遺構埋土は黒褐色土、1、2号住居ともに上部を削平され検出面から床面までの深さは1号が20～30cm、2号が2～5cmであった。2棟とも幅15cmの壁溝が確認できた。

ピットは調査区中央から西側に集中して確認した。形状は不整形が多く、現地で柱筋を確認したが、並ぶものはなかった。遺構埋土は黒褐色で、掘り下げの際、炭化米が出土した遺構は埋土を採取している。

遺物（第11図、1～3図）

1は、1号住居出土の土師器高壺脚部である。2・3は2号住居出土。2は土師器壺で外底面に粗雑なケズリの痕が残る。3は土師器高壺壺部。3点とも概ね5世紀前～中ごろの所産であろう。

（2）12区（第9図）

調査区は正倉区画外の東側にあたる。平成21年度に確認された東限の溝（SD-25）の延長と、区画外の遺構の展開を確認するために、既往調査トレント（平成21年度）を再掘削して調査区を設定した。調査区の標高は約29m、面積約900m²である。

確認した遺構は溝状遺構5条（SD-24・25・26・27・28）、石組遺構1基、柵列、ピット多数。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、古瓦。

遺構

SD-24はSD-25・26・27・28を切る近世の溝である。幅2～1.5m、断面形および検出面からの深さは確認していない。SD-25は正倉を区画する東限の溝である。搅乱による削平のため、今回の調査区で確認されたのは長さ8mで、柵列が伴う。幅0.3m、検出面からの深さは約10cmである。SD-26は中世八並城の長方形区画溝である。今回の調査区では搅乱による削平が著しく正確な規模を計測できなかったが、既往調査から最大で5m程度の幅、逆台形の断面形に復元されるであろう。SD-27も八並城の区画溝で平成7年度調査区のSD-1と同一の溝である。幅5～4.5m、断面形は二段堀で検出面からの深さは1.8mである。調査区南半部分は搅乱を受ける。この搅乱は平成7年度調査区に続く大規模なものとなる。SD-28も八並城の区画溝である。幅3～1.5m、検出面からの深さ0.9m、U字形の断面形を呈する。調査区半ばで三方向に分岐する。

石組遺構はSD-28を切る。平面形は隅丸長方形で、長軸2.2m、短軸1.2～2m、検出面から底面までの深さ50cmである。石組は3段が残存し、おもに直径20cm程の円礫で組まれている。粘土で目地を埋めた痕跡もある。上部は削平を受け、部材と考えられる礫が内部に転落した状況で、石組の西辺も欠損していた。石組面および底面は赤く変色し、何らかの焼成施設であったと考えられるが、埋土および出土遺物からは判断出来なかった。

戦前の更地化に伴う埋土は過去調査区でも確認されているが、12区でも調査区南半を広範囲に覆う状況であった。この埋土は、SD-24・27、石組遺構の最終堆積となり、SD-27を破壊する大規模な搅乱の埋土である。

(3) 13区（第10図）

調査区は円林寺境内、平成8年度調査区で確認されたSD-13（南限の溝）の内側の様相を確認するために設定した。結果、SD-13に近い位置のトレンチでは遺構は確認されず、25mほど北方のトレンチでSD-13に平行する東西方向の溝・柱穴を確認した。

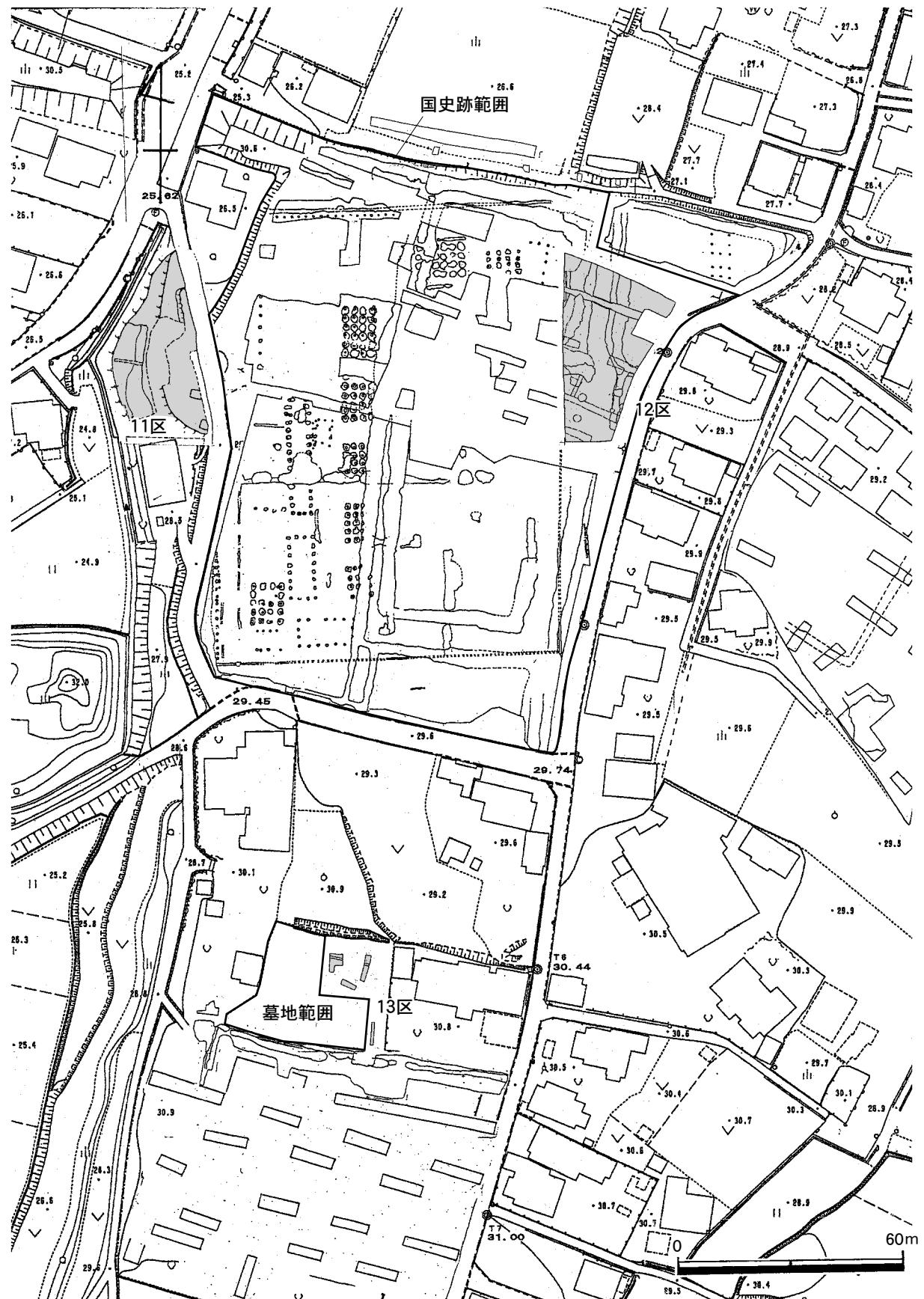
3.まとめ

今年度の調査は、正倉区画外の東・西・南における遺構の展開を確認するものであった。11区では、正倉以前の土地利用を示す古墳時代中期の住居跡が確認された。

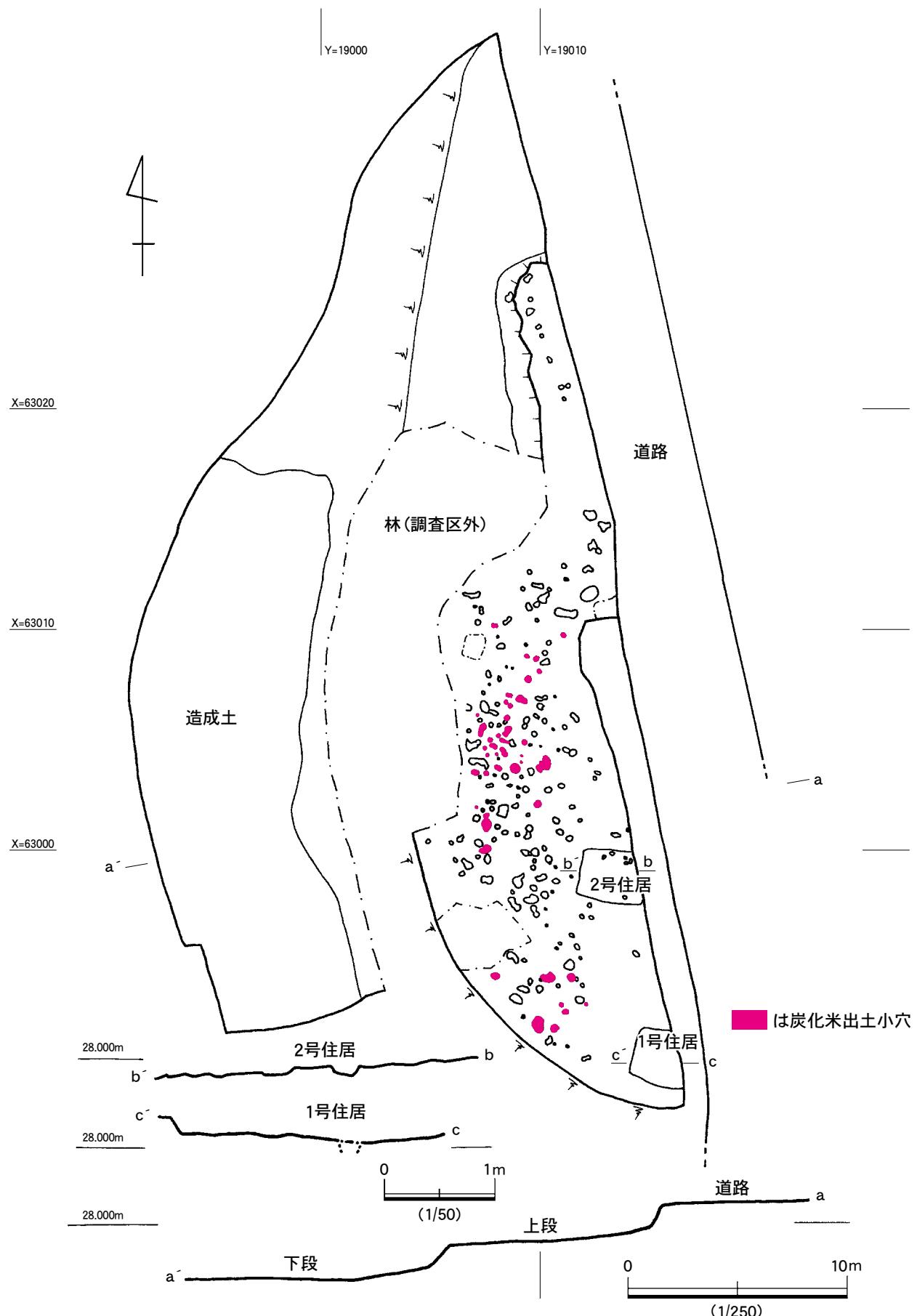
長者屋敷官衙遺跡から約1kmの距離にある相原山首遺跡には5世紀、7世紀の古墳が次々と造られており、沖代条里内では弥生時代から古墳時代の遺跡が確認されている。しかし、過去の調査では、面的に広く調査を行った長者屋敷の国指定地内において、8世紀以前の遺構・遺物とも一切確認されなかった。

今回11区で発見された5世紀の住居跡は台地の縁辺部であり、二軒とも大きく削平をうけ床面がわずかに残るのみである。一方、一部半裁を行ったピットは、一定の深さを保っており、狭い範囲に濃密に分布し、その多くの埋土に炭化米を含む。本来台地は現在のような平坦面ではなく、5世紀の遺構が分布した起伏のある土地であったが、正倉を造るにあたり、平坦に整地を行い、その結果、正倉以前の遺構・遺物は正倉域からは一切検出できなかつたと推定される。二軒の住居跡のわずかに残る床面は、正倉域の整地作業により削平を受けた痕跡であり、傾斜した縁辺部であるがゆえ確認できたものであり、多数のピットは整地作業後に掘られたため一定の深さを維持し、埋土より炭化米が出土したと考えられる。正倉域の成立過程を示す貴重な成果を得ることができた。

12区では、正倉区画の東限の溝であるSD-25が搅乱や中世溝によって破壊されつつもわずかに残ることが確認でき、東限ラインを補強することができた。また八並城の堀跡はSD-26・27・28の3条を確認した。円林寺境内では正倉域と同じ古代遺構の展開が確認され、25年度、面的な発掘調査を実施する。今後、国史跡整備とあわせ範囲確認のための周辺調査を引き続き行う予定である。



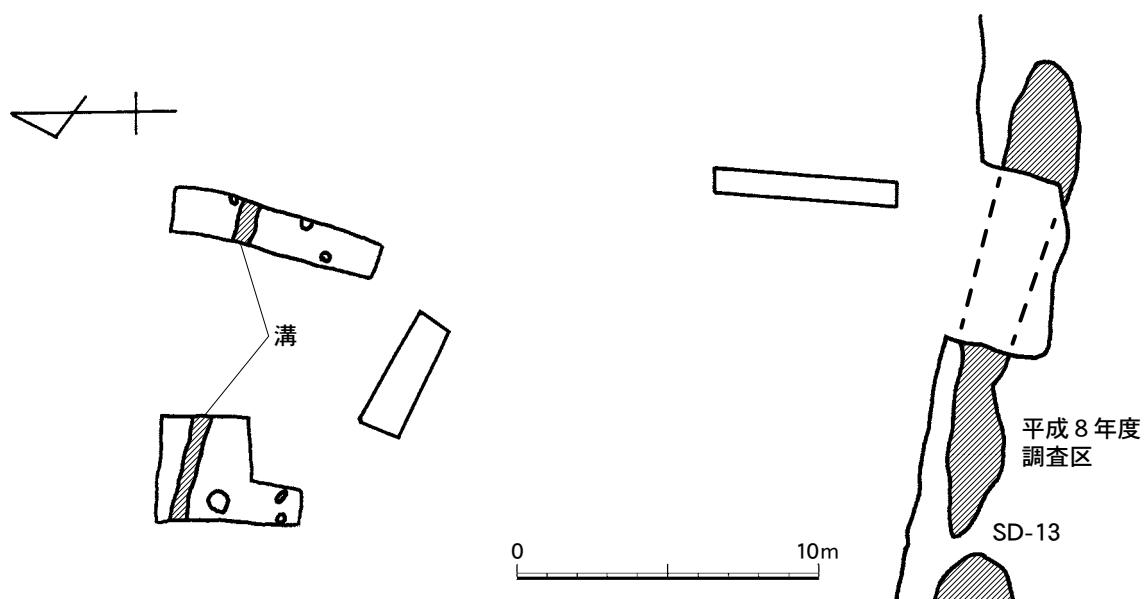
第7図 平成24年度調査区位置図 (S=1/1,500)



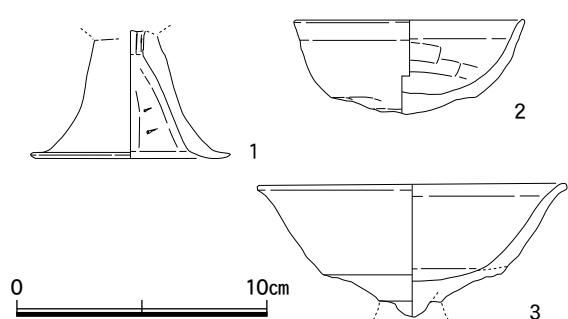
第8図 長者屋敷官衙遺跡11区全体図 (S=1/250、S=1/50)



第9図 長者屋敷官衙遺跡12区全体図 (S=1/250)



第10図 13区図 ($S=1/250$)



第11図 11区出土土器 ($S=1/3$)



写真5 11区 (北から)



写真6 1号住居 (東から)



写真7 2号住居 (北から)



写真8 空中写真



写真9 SD-26（南から）



写真10 SD-27（北から）



写真11 SD-28（南から）

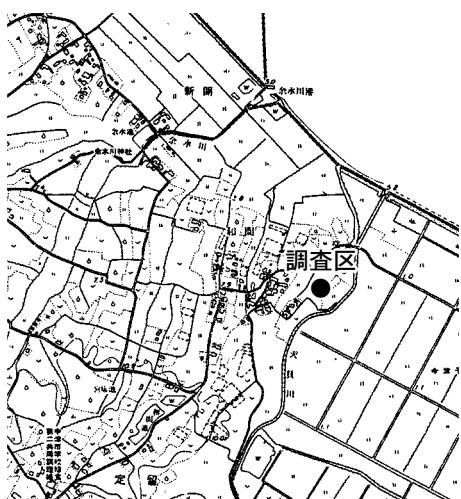


写真12 石組遺構（南から）

第4章 定留鬼塚遺跡干見ノ上地区

1. 調査に至る経緯

平成24年5月2日に中津市の個人より中津市大字定留2357番他地内における農地造成などに伴う事前照会がなされた。照会地は、大分県埋蔵文化財センターが臨港道路中津港線建設工事に伴って、埋蔵文化財の発掘調査が平成23年6月10日～8月25日にかけて実施され、古墳石室2基などの遺構が検出された地区の隣接地に当たることから、試掘調査を平成24年5月1日に実施し、その一部から若干の遺構・遺物が検出され、隣接地で調査された古墳石室の続きの存在が予測された。従って、平成24年7月24日～8月31日にかけて本調査を行った。



第12図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第13図 調査区位置図 (S=1/2,500)

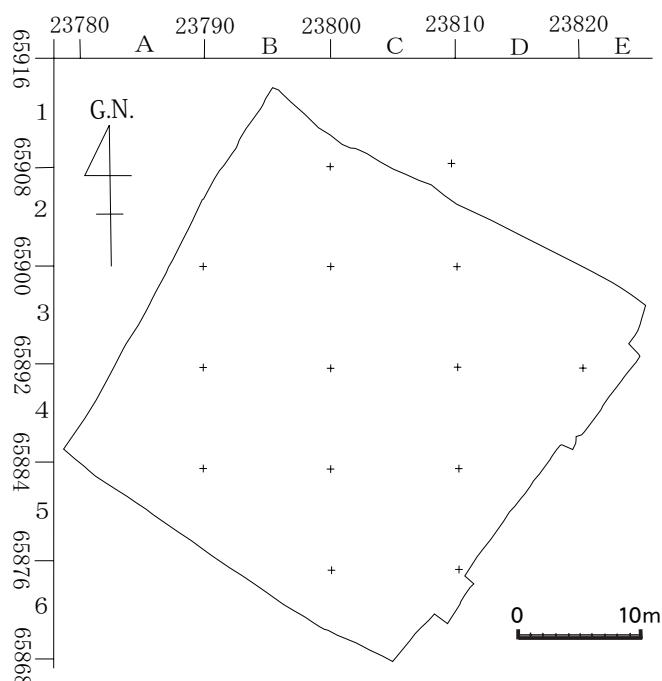
2. 調査の成果

古墳部分の拡張区を除き、ほぼ方形の約1,200m²の調査区を設け、東西にA, B, C……、南北に1, 2, 3……と10×8mのグリッドを設定して調査した（第14図）。

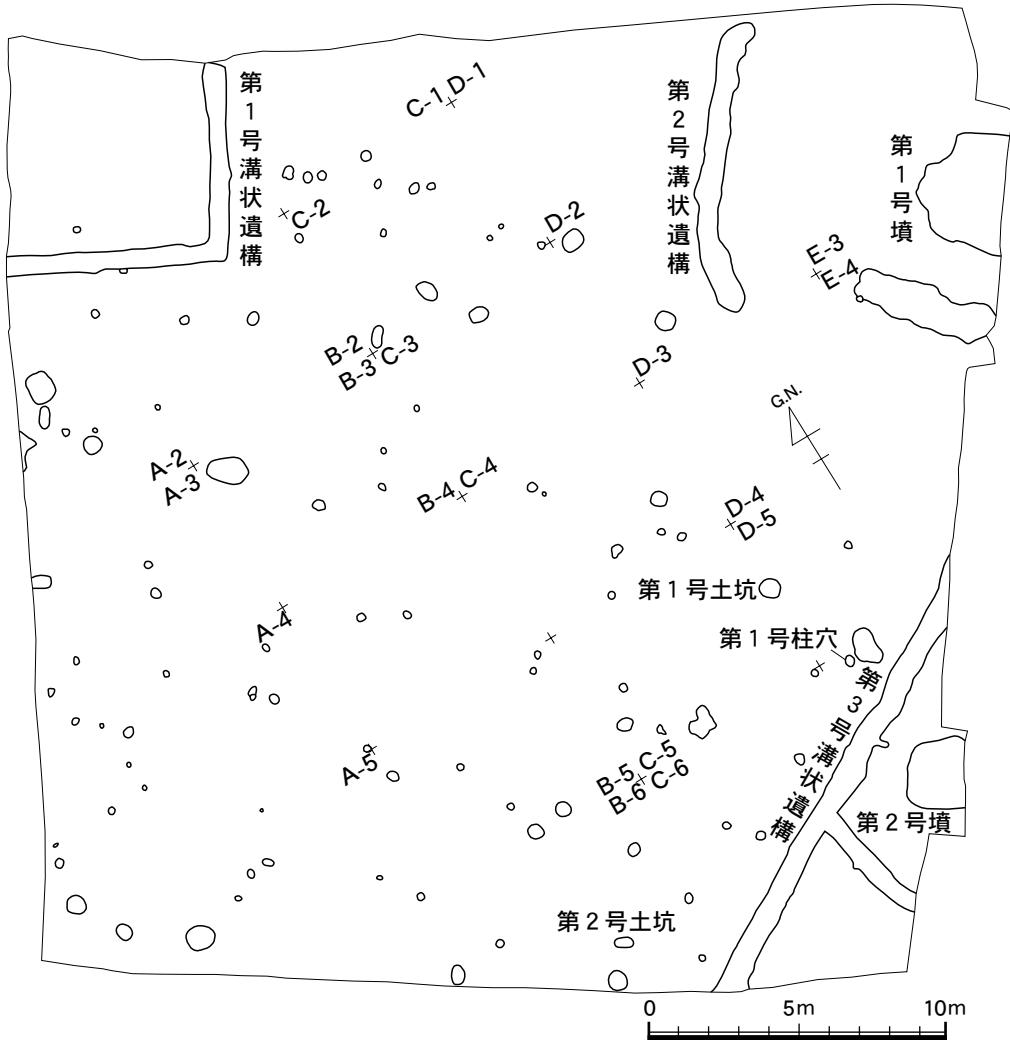
畑の造成時にはほぼ平坦に削平されており、調査区全域で柱穴群・土坑群が検出された他、溝状遺構が3条、古墳石室2基が検出された（第15図）。

①古墳石室

調査区の北東隅に第1号が、南東隅に第2号が検出されたが、両者ともに石室の奥部分で、羨道部分は大分県埋蔵文化財センターが調査した隣接地に存在したと考えられる。



第14図 グリッド位置図 (S=1/600)



第15図 遺構配置図 (S=1/250)

第1号墳（第16図）

調査区北東部分E-3・4グリッドに認められ、石室としては南東-北西の方向を示す。墳丘部は全て畠の造成時に削平され、残存しない。内部に残る敷石までの埋土も、畠造成時混入されたものと考えられ、18世紀代の土器類が出土した。但し、敷石の下部には、古墳造成時に敷いた覆土が残存する。

調査区内で石室の掘り方が、長さは約3.2mが残存し、幅約4.5m、深さ約0.8mを測る。第16図上段に提示したように、20～30cm以下の中・小礫が組み合わされた形で調査区外に接する石室の中央部に集中し、石室最奥部近辺にやや大形の礫が散在する様相が認められるが、敷石除去後に覆土や埋土を取り除いて精査したところ、殊に周辺部で大形の礫の痕跡が観察され、石室の腰石が畠造成時に全て取り除かれたものと推測される。大分県埋蔵文化財センター調査分で、墓道及び石室の半ばが調査されたS-079の奥部分である。

出土した遺物から、古墳の造成時は6世紀末で、畠造成時=18世紀代に破壊されたと考えられる。

出土遺物（第17図）

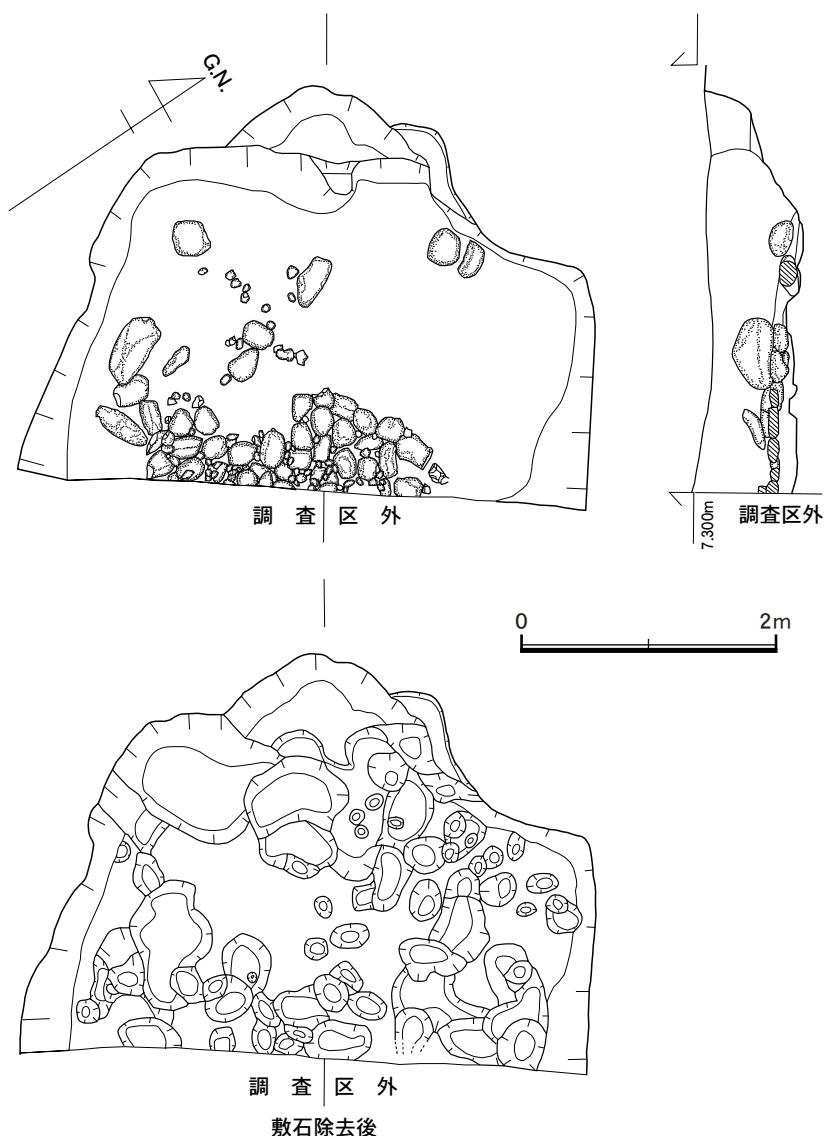
1～3・5は6世紀後半の須恵器である。1は壺の蓋で、半ばほどが残り、ヘラ切未調整。2は壺身の口縁部片である。3は壺の胴部片で、上下2本ずつの沈線の間に櫛歯状工具の刺突文が認め

られる。5は壺の胴部片で、裏面の同心円当て具痕が、表面は平行文タタキをヨコナデで消している。

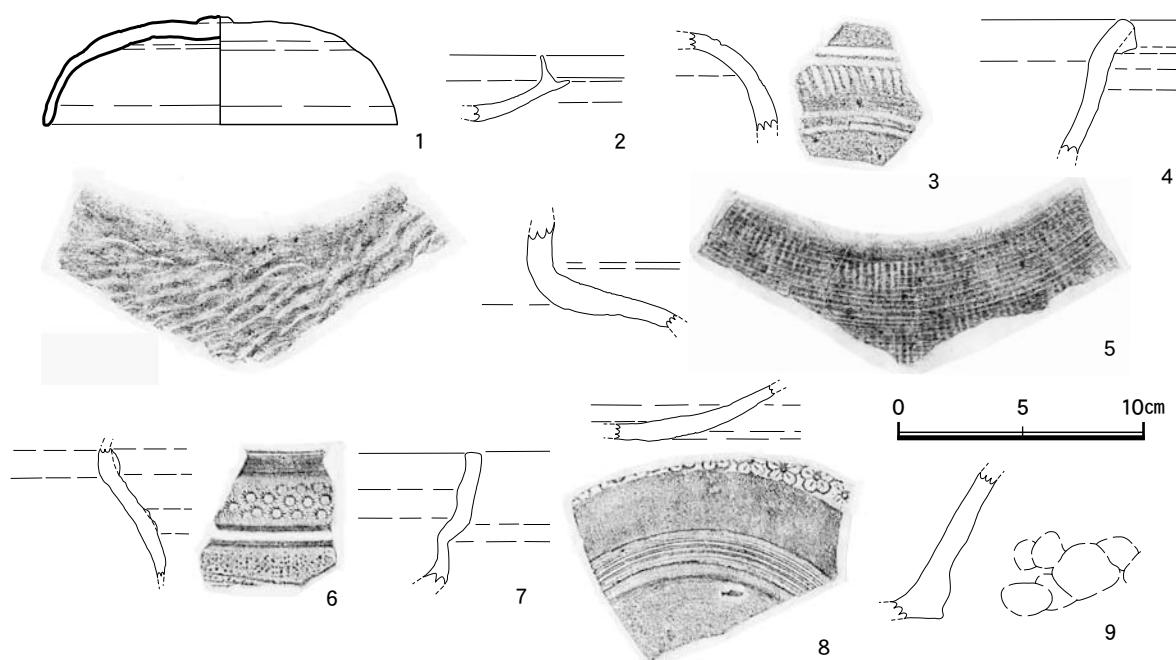
4・6～9は瓦質土器の火鉢である。4・6～8は、口縁部片で、6・8にはスタンプ文が見られ、9は底部片で、蔵骨器か？

第2号墳（第18図）

調査区南東付近のC-7グリッドに位置し、石室としては第1号墳とほぼ同様に南東-北西方向を示す。また、第1号墳同様に、畠の造成時に墳丘の削平を受けており、敷石の上部はその時の埋土と考えられるが、敷石の下部には古墳造成時の覆土が残存していた。



第16図 第1号墳平・断面図 (S=1/60)



第17図 第1号墳出土土器 (S=1/3)

調査区内で石室の掘り方が、長さ約2.0mが残り、幅約2.5m、深さ約0.3mを測る。第18図左側に提示したように、20～30cm程度の小・中礫が組み合わされた形で集中して若かれており、周辺部に40cm以上の大礫が散在するが、敷石類を取り除いた後に精査してみると、周辺部に大礫(=石室の腰石)が既に除去されたらしい痕跡が認められた。大分県埋蔵文化財センター調査分の墓道につながっていくものと推測される。

遺物の出土は少なく、須恵器片・土師器片が数点出土したのみで、古墳造成時は不明だが、第1号墳に近い年代が推定され、破壊時も同様だと考えられる。

②土坑

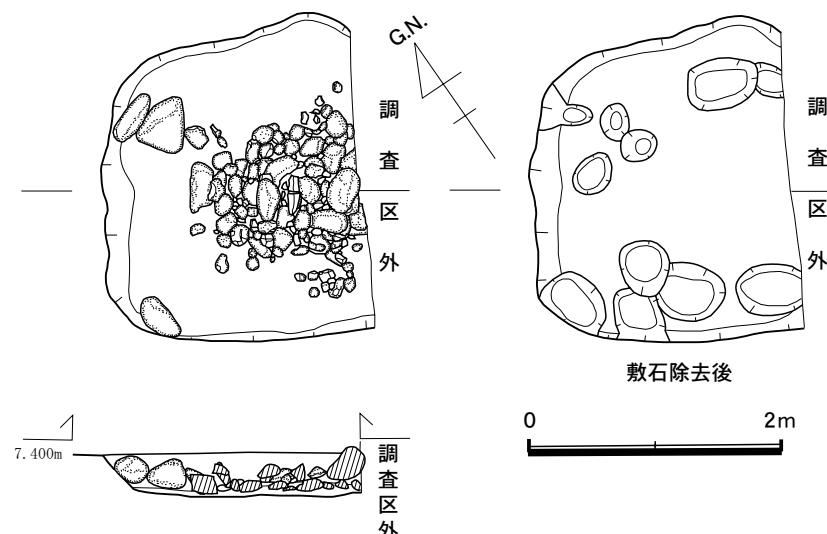
多くの土坑が検出されているが、ここでは2基のみ提示する。

第1号土坑（第19図）

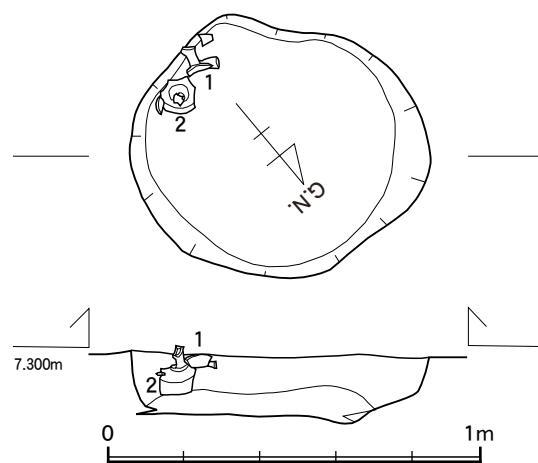
調査区中央部の東寄りのC-5グリッドに位置する。橢円形に近い平面プランを呈し、長径約1.6m、短径約1.4m、深さ約0.4mを測る。須恵器片などが土坑の南隅に集中して出土しており、7世紀初頭の所産だと考えられる。

出土遺物（第20図）

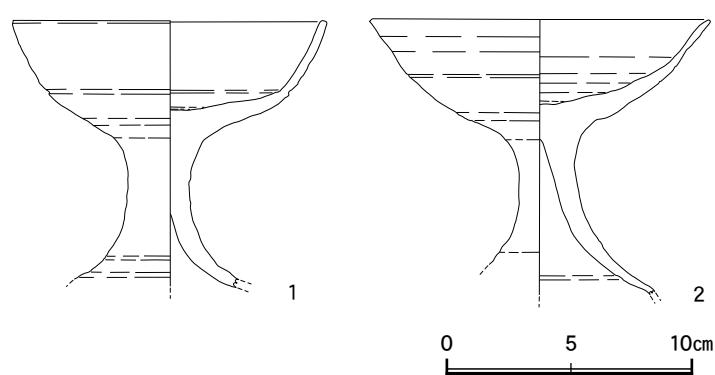
1・2ともに生焼けで赤褐色を呈する須恵器の高坏で、7世紀初頭の所産である。1は、坏部の半ばほどが、2は坏部の9割程度が残存し、両者とも坏部の屈曲部に沈線が認められる。また、1・2ともに脚部の外縁部を欠いており、意図的であるか。



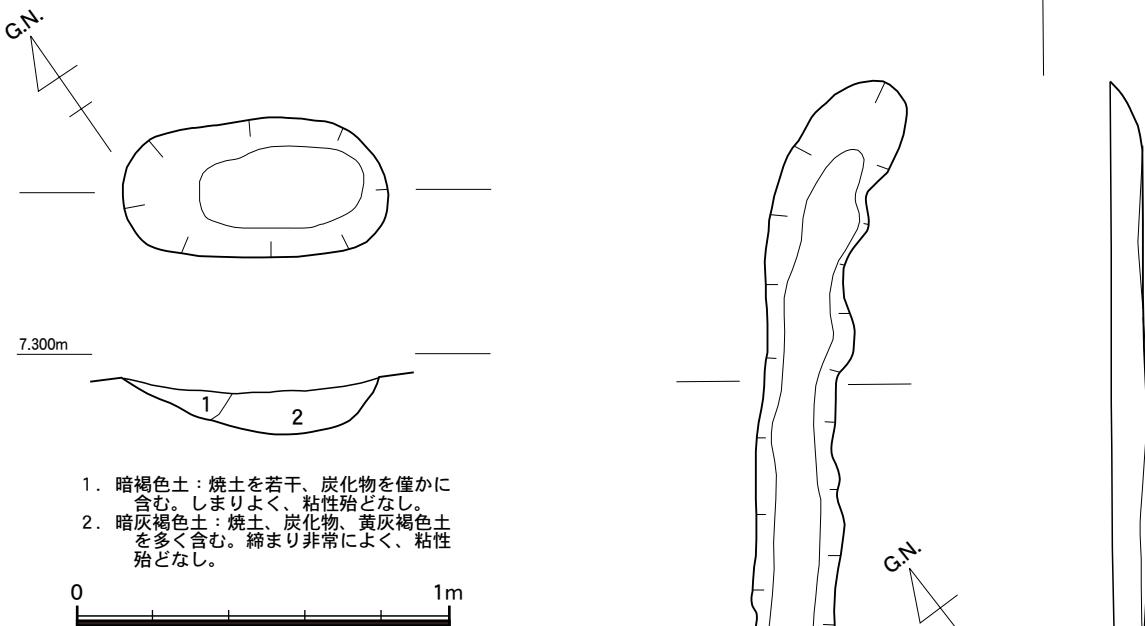
第18図 第2号墳平・断面図 (S=1/60)



第19図 第1号土坑平・断面図 (S=1/20)



第20図 第1号土坑出土土器 (S=1/3)



第21図 第2号土坑平・断面図 (S=1/20)

第2号土坑（第21図）

調査区南西部辺の中央やや東寄りのB-6グリッドに位置する。長径約0.7m・短径約0.4mの橢円形平面プランを呈し、深さ約15cmを測る。遺物が出土していないため、所属時期は判然としないが、覆土に炭化物・焼土を多く含む。

③溝状遺構

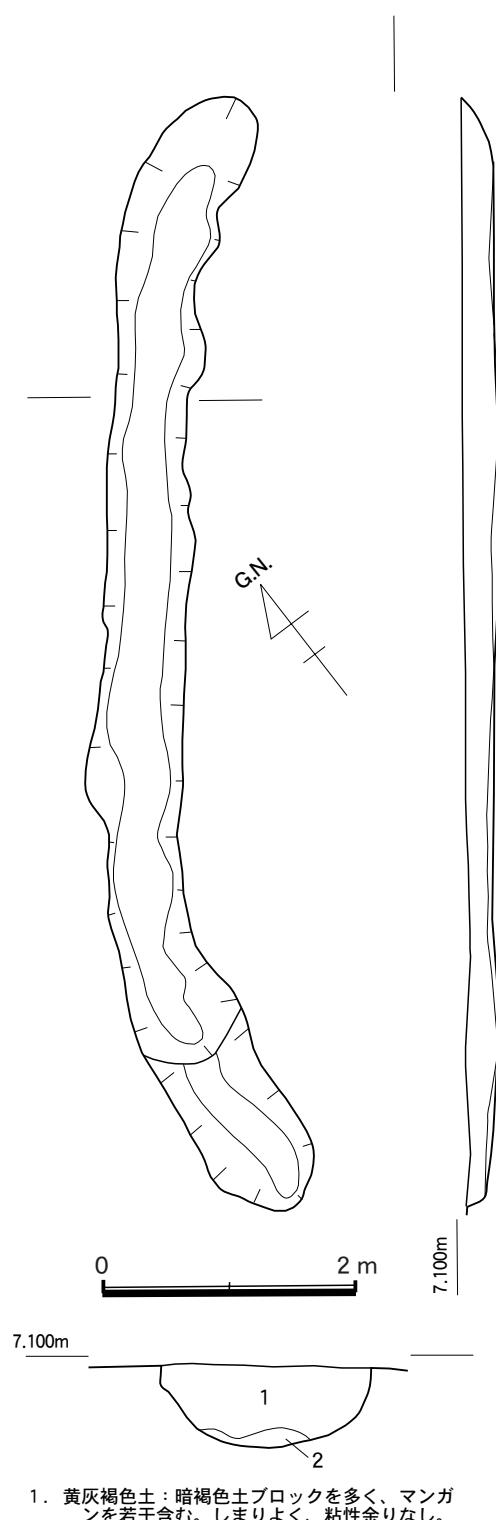
調査区北西部に第1号、調査区の北東部に近い位置に第2号、調査区南東部に第3号が検出されたが、第1・3号は出土した遺物から近代以降の所産と考えられるため、第2号のみを提示する。

第2号溝状遺構（第22図）

調査区北東部に近いD-2・3、E-3グリッドに位置する。現状で長さ約9.0mを有し、幅約0.9m、深さ約3.3mを測る。遺物が出土しておらず、所属時期は判然としないが、全体的に緩やかな弧状を呈し、第1号墳から6m強とほぼ一定の距離を保っていることから、第1号墳の周溝である可能性がある。

④他の遺物（第23図）

ここでは、調査区東端中央に近いD-6グリッドに位置する第1号柱穴から出土した遺物を提示する。1・2ともに、6世紀後半の須恵器の坏身の口縁部片である。



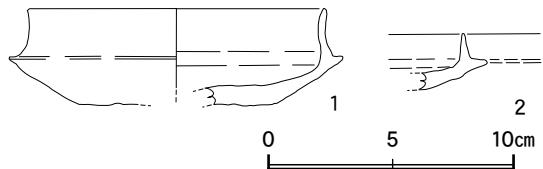
第22図 第2号溝状遺構平・断面図
(S=1/60、但し土層図はS=1/30)

3. 小結

近代以降のものを除くと主な遺構は、古墳時代終末に近い6世紀後半～7世紀初頭の群集墳であり、それに関連すると考えられる第1号土坑・第1号柱穴が存在するのみで、全て調査区の東部辺に偏り、中心は大分県埋蔵文化財センターが調査した、本調査区の北東側に拡がると考えられる。

第1表 土器観察表

図版 番号	遺構 番号	出土遺構 出土地点	種類	器種	時期	色 調		器面調整		胎 土	法 量(cm)			備 考
						内面	外面	内面	外面		口径	器高	底径	
	1	第1号墳	須恵器	壺蓋	6C後半	灰茶色	灰茶色	ヨコナデ	ヘラ削り	石英 角閃石	14.0	5.6	4.25	復元
	2	第1号墳	須恵器	壺身	6C後半	暗灰色	暗灰色	ヘラ削り	ヨコナデ	石英				
	3	第1号墳	須恵器	腹	6C後半	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	沈線 刺突文	石英,長石				
	4	第1号墳	瓦質土器	鉢	18C代	赤茶色	赤茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英,長石 角閃石				
	5	第1号墳	須恵器	壺	6C後半	暗灰色	暗灰色	タタキ	タタキ	石英,長石				
	6	第1号墳	瓦質土器	焜炉	18C代	灰茶色	灰茶色	ヨコナデ	スタンプ	長石				
	7	第1号墳	瓦質土器	火鉢	18C代	灰茶色	灰茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	長石,石英				
	8	第1号墳	瓦質土器	火鉢	18C代	暗茶色	暗茶色	ヨコナデ	ヨコナデ スタンプ	長石				
	9	第1号墳	瓦質土器	火鉢	18C代	赤茶色	赤茶色	ヨコナデ	指オサエ	石英 赤色粒子				
	1	第1号土坑 P1	須恵器	高坏	7C初頭	淡茶色	淡茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英,長石				
	2	第1号土坑 P2	須恵器	高坏	7C初頭	赤茶色	赤茶色	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ削り	石英				
	1	第1号柱穴	須恵器	壺身	6C後半	褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	角閃石	11.8	3.8	7.8	復元
	2	第1号柱穴	須恵器	壺身	6C後半	灰茶色	灰茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英 角閃石				



第23図 第1号柱穴出土土器 (S=1/3)



写真13 第1号墳完掘状況



写真14 第2号墳完掘状況



写真15 第1号土坑遺物出土状況



写真18 第2号溝状遺構完掘状況（北から）

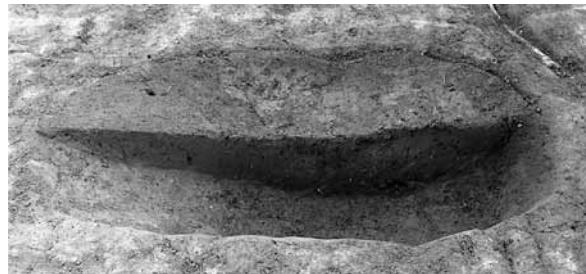


写真17 第2号土坑半截土層



写真19 第2号溝状遺構土層断面



写真20 第1号土坑出土土器



写真21 第1号柱穴出土土器

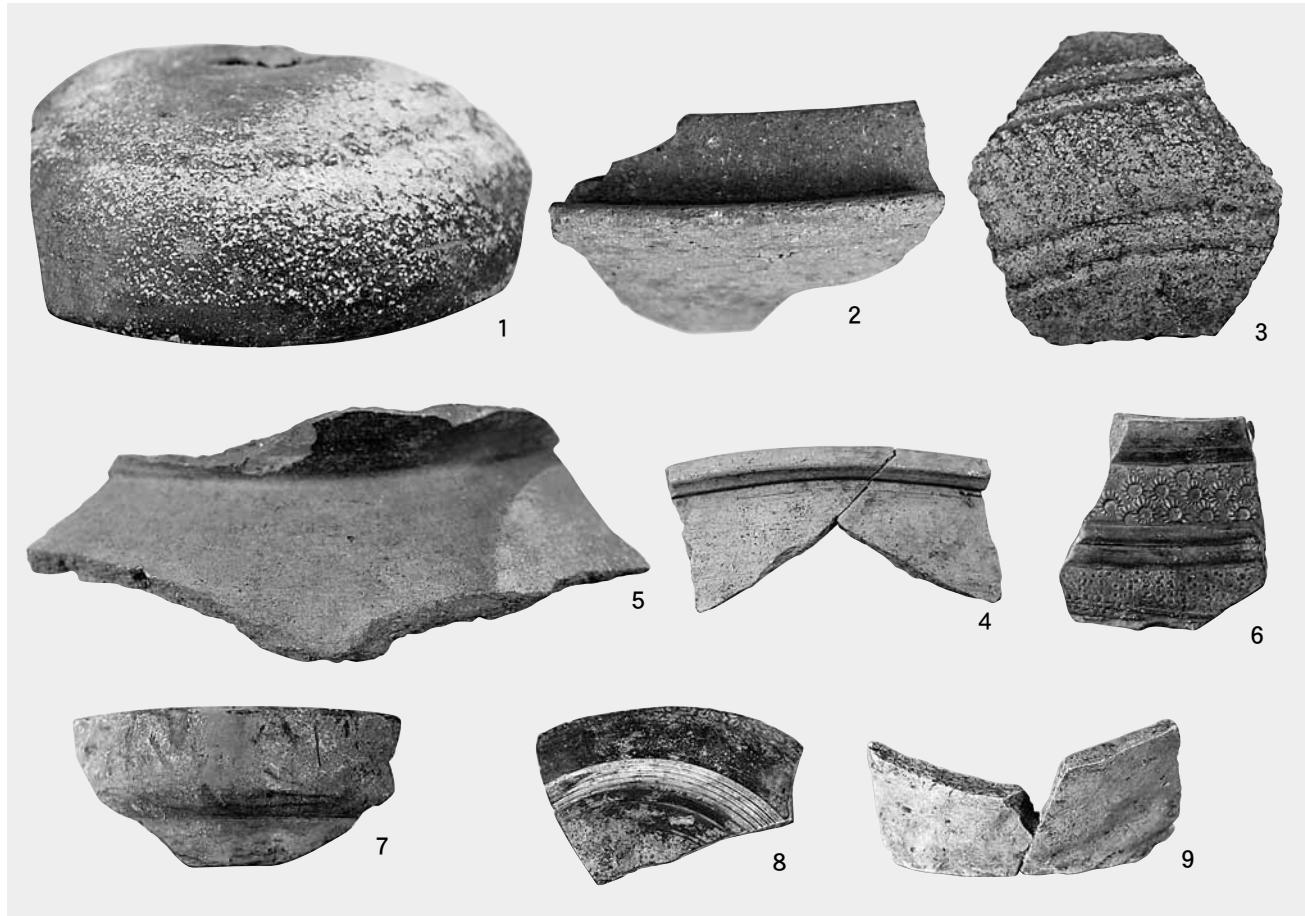


写真22 第1号填出土土器

報 告 書 抄 錄

書 名	沖代地区条里跡 長者屋敷官衙遺跡 定留鬼塚遺跡							
副 書 名	市内遺跡発掘調査概報							
卷 次	6							
シ リ ー ズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第63集							
編 集 者 名	浦井 直幸 森田 利枝 萩 幸二							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
沖代地区条里跡	大分県中津市大字湯屋326-5	44203	203007	33°	131°	20121019	15m ²	個人住宅
	大分県中津市大字湯屋326-6	44203	203007	34'	11'	20121019	26m ²	個人住宅
	大分県中津市大字湯屋326-1	44203	203007	36"	24"	20121121	71m ²	個人住宅
	大分県中津市大字湯屋326-9	44203	203007			20121211	23m ²	個人住宅
	大分県中津市大字 永添2327番7他	44203	203119	33°	131°	20120524		
長者屋敷官衙遺跡				34'	12'	~		
				5"	16"	20121225	1600m ²	保存整備
	大分県中津市大字 定留2357番1他	44203	203282	33°	131°	20120724		
定留鬼塚遺跡				35'	15'	~		
				38"	23"	20120831	1200m ²	農地造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
沖代地区条里跡	水田	古墳	流路	土師器・須恵器				
長者屋敷官衙遺跡	官衙	奈良・平安	区画溝	土師器・須恵器				
定留鬼塚遺跡	古墳	古墳	古墳	土師器・須恵器				

**沖代地区条里跡
長者屋敷官衙遺跡
定留鬼塚遺跡**

市内遺跡発掘調査概報 6

2012年度

中津市文化財調査報告 第63集

2013年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 (株)川原田印刷社